

平成27年度末大学院派遣教員に係る実践研究報告書

香美市立鏡野中学校 教諭 山崎美知与

1 研究の成果と課題をふまえた平成28年度の実践内容

(1) 大学院における研究の成果と課題

昨年度は、「中学校における子どものかかわりを深めて学び合える授業づくり」を研究テーマとして、子どものかかわりについて「国語」でユニバーサルデザインに基づく授業の5つのポイントから、「Ⅲ 活動内容の工夫」と「Ⅴ 評価の工夫」に焦点を絞り実践を行い、グループ活動を用いてかかわりを深めることが、学びの広がりやコミュニケーション力や向社会性の育成に繋がるのかを検討した。

具体的な支援の方法として、以下の4点で実践を行った。

「Ⅲ 活動内容の工夫」では、①役割分担カードを使用してグループ内での役割を決め、②グループでの話し合いでホワイトボードを活用し、③資料はグループで共有した。また、「Ⅴ 評価の工夫」では、④肯定的な内容のスタンプを使って生徒同士で相互に評価を行うようにした。

成果としては、生徒のアンケートや実践協力教員の振り返りから、グループ活動時において生徒同士のかかわりを一定増やすことができ、生徒の理解や学びの広がりもみられたことである。

成果をふまえた課題として以下の三つがあげられる。

第一は、生徒同士が学び合うグループ活動となるような課題の設定である。第二は、かかわりへの配慮である。今回の実践が、他者とのかかわり自体に困難を示す生徒への支援として有効であるのかについては、他学級でも実践を行い、検討する必要がある。第三は、グループ活動を行うことで個々の生徒の学習にどのような効果があったのかを客観的に把握することである。今回はアンケートへの自由記述で変容を捉えたが、生徒がどのように学び、変容しているのかを客観的に把握する方法を考えていかなければならない。また、学力向上につながるのかについても今後の実践の積み重ねと検証が必要である。

(2) 平成28年度の実践内容

近年、香美市内の小学校において、通級指導教室で指導を受ける子どもが増加傾向にあり、小学校卒業後も中学校における通級指導を必要とする子どもたちのために、今年度中学校通級指導教室が新設された。その中学校通級を担当することになり、昨年度は多層指導モデル(MIM)における1stステージでの支援についての研究を中心に行ってきたが、本年度は3rdステージで、より個に特化した実践を行ってきた。

ア 小中学校における通級指導の連携

小学校から中学校への移行は、環境面で子どもたちに様々な変化をもたらす。特に学習への困り感をもつ子どもにとって、中学校での教科担任制など学習環境の変化は、大きな不安の要因となる。子どもたちが自己理解をし、自己肯定感や自己有用感をもって学校生活を送り、将来に夢や希望をもって学ぶためには、個に応じたユニバーサルデザインの視点が必要となってくる。

そこで、小学校で通級指導を受けてきた子どもたちが、環境の変化に大きな不安をもつことなく、中学校での学習に取り組めるように、小中における通級指導の連携を行った。小中学校通級指導担当者の指導法について、互いの通級での授業を参観したり、様々な困り感をもつ子どもたちに有効だった支援方法や具体物などの情報を共有し、個に応じた指導に活用した。

イ 中学校通級指導教室の取り組み

中学校から通級の対象となる生徒にとって、授業から取り出して通級教室に来ることが大きな壁となる。特に1年生では、近隣5校の小学校から入学してくるため、本人が中学生として新しい環境でみんなと一緒に頑張りたいという思いも強い上、周囲にどう思われるかという不安も高く、取り出されることに否定的である。そのため、通常学級での授業で T2 的な支援を行ったり、放課後を利用するなどの柔軟な対応を行った。授業へ T2 的にかかわることで、その授業の中でどこに困り感があるのかなど実態把握することができ、授業後に教科担当者と困り感への手立てをユニバーサルデザインの視点から話し合い、支援方法の提案なども行った。

また、学級担任と連携を取りながら周囲の生徒たちの温かいかわりができるような学級づくりを進めるとともに、時機を見て本人とも面談をくり返しながら通級での学習についての理解を深めるようにしたことで、通級教室への取り出しが可能となったケースもあった。

2 平成28年度の実践の成果と課題

実践の成果としては、以下の二つである。

第一は、通級指導教室での手立てが学級担任や教科担任に共有され通常の学級においても手立てが行われることで、学習へのモチベーションが下がらないように維持できたことである。第二は、小中学校通級指導担当者の指導法について、共同研究や情報提供をすることによって、中学校進学後の個に応じた指導がスムーズに行えたことである。

課題としては以下の二つがあげられる。

第一は、特別支援的な視点での小中連携の意識向上とともに、小中学校が通級指導教室の指導方法をリソースしていくために、1年間の動きを年度当初に提示し、組織的に取り組んでいく必要がある。特に中学校では、教科担任といかに連携をとり、授業場面で活用できるようにしていくのが重要であると考え。第二に、小学校から中学校への指導・支援の引き継ぎと個々の進路を視野に入れながら発達段階に応じた指導方法の研究を、今後も継続していく必要がある。個々のニーズに合った適切な支援について更なる研鑽に努めていきたい。

《参考文献》

- 1) 高知県教育委員会 (2013) すべての子どもが「分かる」「できる」授業づくりガイドブック～ユニバーサルデザインに基づく発達障害の子どもだけでなく、すべての子どもにあると有効な支援～。
- 2) 海津亜希子・田沼実畝・平木こゆみ・伊藤由美・Sharon Vaughn (2008) 通常学級における多層指導モデル (MIM) の効果ー小学1年生に対する特殊音節表記の読み書きの指導を通じてー